



Title	<書評>V. V. エルミーロフ 「N. V. ゴーゴリ」
Author(s)	北垣, 信行
Citation	スラヴ研究, 1, 119-123
Issue Date	1957
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/4927">http://hdl.handle.net/2115/4927</a>
Type	bulletin (article)
File Information	KJ00000112868.pdf



[Instructions for use](#)

## V・V・エルミエロフ『N・V・ゴーゴリ』

V.V. Ermilov, N.V. Gogol', Moskva, 1952.

北 垣 信 行

## 1

初版は既に 1953 年に出ているので厳密な意味ではもはや新刊書とは云えないこの本をとりあげた理由は二つである。一つは単なる表面的な理由で、この著作が今年になって著者の三巻選集に収録されて再刊されたこと。もう一つは内面的な理由で、本書の質に関係がある。即ち、ソヴィエトでは 1952 年以來、文豪の死後百年を記念して『オクチャープリ』、『ズナーミヤ』等の文芸雑誌に掲載された諸論文は別としても、G・N・ポスペーロフ著『H・V・ゴーゴリの創作』(1953年)、M・B・フラプチェンコ著『ゴーゴリの創作』(1954年)、Ju・ガエツキー著『ゴーゴリ』(1954年)、Ja・エリスベルク著『ゴーゴリ・シチュドリンの遺産とソヴィエトの諷刺文学』(1954年)、『ゴーゴリ。論文及び資料』(1954年)、N・L・ステパーノフ著『N・V・ゴーゴリ。創作の道』(1955年)等、評伝や研究書が次から次へと出版されて来た中において、このエルミエロフのものが質的に際立って優れており、その独創的な見解とするどい批評眼の点で断然他を圧していることである。

これらの文献の中で類書と思われるもの、つまり純然たる評伝の形をとっているものを挙げれば、ポスペーロフ、フラプチェンコ、ステパーノフのものがこれに属するが、エルミエロフの『N・V・ゴーゴリ』は、全編の構成の点で、これらの類書には見られない幾つかの特色を持っている。その第一は、本書は等しく評伝の形をとっていながら、伝記的叙述にはあまりスペースを割いておらず、伝記的説明はこれを作品の解説に必要なだけの範囲にとどめ、それもゴーゴリの内面生活に主眼をおいて、それを作品と関係させ、全体として作品論的傾向を打ち出している点である。更に、第二の特色と思われる点は、作品を解説するに当たって、大別すればいわゆるウクライナものからペテルブルクものへ、更に『検察官』から『死せる魂』へと筆を進めながらも、個々の作品を制作年代順にとりあげ

るといようなあり来りな方法をとらずに、作品の傾向によって分類整理して、まとめて解説するという賢明な方法をとっている点である。例をあげれば、おなじウクライナものでも、リアリスティックな生活的な要素が幻想的架空的な要素と結合しているという点で、他のウクライナに取材した洋にリアリスティックな要素のみから成る作品群と趣を異にする『ディカーニカ近郷夜話』を、『ミールゴロト』の中のおなじような特色を有する『ヴィーイ』とともに一括して論じ、英雄叙事詩である歴史小説『タラス・ブーリバ』を、<sup>スシチエストヴオウゾーテリ</sup>社会の寄生虫、ゴーゴリの云々生存者をあつかった『敵気質の地主たち』、『イヴァン・イヴァーノヴィッチとイヴァン・ニキーフォロヴィッチが喧嘩をした話』と切り離して考察し、更に、ウクライナものの第三の作品群を構成するこれら『敵気質の地主たち』と『喧嘩をした話』を説くに当たっては、その先駆的作品である『近郷夜話』中の『イヴァン・シュポーニカとその叔母』から説き起すと云ったぐあいなのである。こうした整理の仕方は、とりどりの傾向の作品を制作年代順に雑然と羅列していく方法に比して、著者にとって叙述上、より便利であるばかりでなく、一方読者にはゴーゴリの作品の幾つかの基本的な特質を強烈鮮明に印象づけ得るという利点を有する。特に、ゴーゴリのように一時に幾つもの作品を平行的に書き進めていった作家の場合には、発表年次に従って作品をとりあげていく方法の方が却って合理的でない<sup>と</sup>さえ云えるわけである。

## 2

ゴーゴリの評伝に限らず、ソヴィエトの文学者による古典作家の評伝の常套的な書き方に、まずその冒頭に時代的背景を持ってくるやり方がある。この方法は、書く方の側から見て書きやすいという利点を持つ反面、この方法による時は、その時代的社会的背景が単に作家の肖像画とは全く無縁な、別個の風俗画のようなものになってしまう惧れが多分にある。エルミエロ

フも本書においてこの方法を踏襲しているが、著者はここで、1830—40年代の、デカブリストの蜂起が失敗に帰した後のニコライ治下の暗黒時代、ベンケンドルフとウヴァーロフの、暴力と抑圧と沈滞の時代を素描したあとで、「祖国にたいするひたむきな愛情の力によって時代の要求をふかく理解し」、「祖国に必要なのは暴露作家であり、悪を容赦なく打ちくだくことを志す闘士であることをはっきりと意識していた」ゴーゴリの歴史的役割をその時代的背景と結びつけることによって、これを完全に生かしきっている。

この社会的背景のあとには、型のごとく、ゴーゴリのウクライナの片田舎における生いたちとペテルブルク上京後の不遇の生活の描写が続くのであるが、ここでは著者は専ら、後に作品に形象化されるゴーゴリの精神の形成過程の追求だけを旨として、それに役立つ伝記的事実を努めて切り棄てようとしている。例えば、著者は、まだネーゼン高等中学校に在籍していた十八歳のゴーゴリが、一足先に上京していた先輩で親友のヴィソツキーに当てて出した手紙の中の、「君は僕らの町の<sup>スシチェストオヴグアータリ</sup>生存者どもを、ネーゼンに居住する連中を、一人残らず知っているだろうが、あの連中は地上的なもの、つまり下らない自己満足の殻の中に閉じこもって人間の高い使命を押し殺してしまっているのだ。そして、僕はこういう<sup>スシチェストオヴグアータリ</sup>生存者どもとの間に躡躑して暮さなければならないのだ、云々」という言葉の中に、成年にも達しない未来の文豪がこの頃既に、後に<sup>オブイグアータリ</sup>俗物という言葉で特徴づけた、生きるためにのみ生きる人間、後のイヴァン・フォードロヴィッチ・シュポーニカ、イヴァン・イヴァーノヴィッチ、イヴァン・ニキーフォロヴィッチたちの下らない自己満足にたいする彼の軽蔑、嫌悪の情を読み取り、そこに彼が後に諷刺的作品を生むにいたる批判精神の芽を見出している。また、著者は、ゴーゴリの逸話として残っている、学生時代における農民との交際や民謡の蒐集熱に、『夜話』や『タラス』に現れている民謡的民謡的性格と彼の全作品の人民性、民主性的精神的根源を見ている。更に、エルミーロフは、ゴーゴリのペテルブルクの生活の描写でも、ゴーゴリ自身の表現によれば「夏外套で丸一冬をとおした」下っぱ役人としての彼の生活を叙するに当っては『外套』の中の一場面<sup>の描写</sup>を利用し、ゴーゴリが絵画の修業をしていた頃の若い画家のグループを特徴づけるに当っては『ネフスキー通り』の中の画家たちの一般的性格づけを利用すると云ったようなぐあい<sup>に</sup>、常にゴーゴ

リ自身の生活と作品とを関係づけることを忘れていない。

このあと、『検察官』の解説に行きつくまで、著者はゴーゴリ自身の生活については殆んど一言も触れていない。全体の四分の三くらいまで行ったところで、われわれは初めてふたたび伝記的叙述にめぐりあうのである。しかも、著者はここでも文豪の外面的生活にはあまり注意を払っていない。『検察官』の上演後ゴーゴリが四方からの非難攻撃によって受けた打撃と傷手、外国へ亡命（著者は彼の長期の外国滞在を<sup>実質的に</sup>亡命であると断じている）を余儀なくされた作者の苦悩と悲哀、これを契機としてゴーゴリが次第に宗教的反動的傾向を辿るにいたる経緯等、そこには1837年以降におけるゴーゴリの内面生活の推移の叙述だけが見出される。即ち、著者はここでも専ら文豪の精神の動きのみを照らしたそうとしているわけである。が、それにしても、これはわたくしだけの印象かも知れないが、作家の晩年における思想的反動化について云うならば、まだその突込み方が足りないような感じがしないでもない。成るほど、ここで著者は、1842年に発表された中篇小说『ローマ』の中の、ゴーゴリの「パリーにたいする歪められた観察、当時のパリーの尖鋭化した政治生活、政治的関心、つまり時代への関心の激刺さにたいする否定的特徴づけ」と、「ローマにたいする近視眼的観察、あらゆる現代的関心から離れた、静かな、美しい芸術の孤島としてのローマの描写」に、当時のゴーゴリの政治的無関心、反資本主義的反抗と古代の理想化との、「家長政治」のもっとも反動的な理想化との結合を、事実として慧眼にも見抜いている。またここでは、文豪の反動化の原因として、前衛的なわかいロシヤとの結びつきの欠如から来る孤独感や、1837年における、彼の事実上の思想的指導者であったプーシキンの死や、長期の外国滞在や、ゴーゴリ自身の身心の衰弱を挙げ、これらについて縷々説明を加えてもいる。併し、『作家の告白』からも明らかなように、この頃のゴーゴリの内部では、たとえその方向は誤っていたにしても、プーシキン亡きあとの独力による人生観の確立の真摯な営みがひそかに行われていたはずである。わたくしは、この経過を、文豪の精神に密着した態度で迎ってもらいたかったと思うのである。

更に著者は、伝記的部分の最後の箇所<sup>で</sup>ゴーゴリの死について考察するに当って、この問題にたいして決定的な判断を下すことは避けているが、チェルヌイシ

ェーフスキー、ツルゲーネフの言を援用することによって、なかば自殺説を支持するような姿勢を示している。その是非は別として、注目に値する点であるということとは云える。

## 2

エルミエロフがゴゴリの作品をあつかうに当たって、その最も重要な特質と見ているのは、人民性ナロードノスチと民主性デモクラチズムとであろう。われわれは本書の作品論の部分を読みすすむ時、物語の解明の間を、あたかも時折地上に露頭をあらわす鉱脈のように、この二つの特質が貫きとおっているのを発見する。

例えば、著者は、『夜話』や『ヴィー』では、これらの作品に出没する悪魔たちを、ポーランドの貴族やその令嬢の姿をとる反民族的な力と見、グリツコーとパラスカの、レーフコとガンナの、ヴァクレーラとオクサーナの幸福な結合を妨げようとする非人民的な力と見ており、また、作者が『降誕祭の前夜』の中でそれとなくエカテリーナと宮廷の散文的な描写にオクサーナやヴァクレーラを含むカザックの生活の詩的な描写を対置し、貴族的な美の観念に人民的なそれを対置している点を詳細に分析したあとで、「…ヴァクレーラによって代表される人民の生活の詩的な世界はすべて、この宮廷のきらやびやかな卑俗性に、退屈な虚偽性に、…これらの燦然たる将官連に、優越するものであることを、われわれは知るのである」と説いている。また、これはエルミエロフが最初に指摘したことではないが、著者は『タラス・ブーリバ』の中でも堡塁を守るポーランドの将兵のきらやびかな装いとカザックの質素な武装の描写の箇所を引用して、侵略軍の柔らかな貴族的性格とザポロージェの軍隊の質実剛健な人民的性格の対置から、作者の精神の人民性という一面の特質を抜きだしている。

更に、ゴゴリの作品の民主性については、その証拠の一つとして著者は、おなじ『タラス・ブーリバ』の中でカザックの軍営長が選挙のあとで述べる次のような挨拶の言葉を引合いに出す。「わしは皆の意思の下僕じ。事態はすでに明々白々じ。それに、聖書からも明らかなように、民の声は神の声じ。民が全部で考えだすことより賢明なことなぞ、考えだすことは到底できんのじ。からな」著者は、こうした実例に、「ポーランドの貴族的えせ民主制」とは対底的な、セーチの真の意味の「民主的生活様式」にたいする作者の讚美を見てとっているのである。

このように、古典における人民性や民主性をはっき

りと見きわめてこれを批評の前面に押しだそうとする傾向は、ひとりゴゴリのものに限らず、ここ四・五年來の、古典全般にたいするソヴィエトの批評の一つの主要な傾向と見られる。ロシア文学にこの種の性格がはっきりと現れだしたのはプーシキンにおいてであり、その作品『駅長』、『葬儀屋』、『青銅の騎手』、『大尉の娘』等においてであるという見解は一般的であるが、ロシア文学をそうした方向へ一段と強力に推しすすめたのが他ならぬこのゴゴリであってみれば、こうしたエルミエロフのゴゴリの性格の基本線の出し方には、まず間違いはないと見て差しつかえあるまい。

もう一つ、この人民性や民主性ととともに、エルミエロフがゴゴリの作品の特質として強調している点に、祖国愛、愛国主義がある。著者は、伝記的叙述の部分でも、たとえば、外国滞在中のゴゴリの書簡の随所から彼の祖国にたいする愛情の実例を拾いだして来ているが、作品の解説の部分でもこれを繰返し強調している。たとえば、彼は『タラス・ブーリバ』の中でも、この散文の叙事詩について、「愛国主義とふかい人民性との結合が物語全体を特徴づけている」とか、『タラス・ブーリバ』は「国家意識のペーソスによって貫かれ、民族の生存それ自体を救う唯一の手段たる強力な国家なるイデーに貫かれている」というような特徴づけを行っている。

確かに、ゴゴリの場合、この愛国的精神は彼の精神の本質的要素として強調されて然るべき特質である。自国への奉仕という観念は一生涯彼の念頭を離れなかつたところのものである。それは、例えば、『作者の告白』中の「わたくしはかつてこの奉仕の考を棄てたことは一度もなかつた。わたくしは、文学の方面でも自国に奉仕することができると悟った時、初めて作家としての職業に甘んずることができた」というゴゴリ自身の言葉に徴しても明らかである。ゴゴリにおける、ヴェンゲロフの云わゆる「市民作家」への転廻も、諷刺作家ゴゴリの誕生も、ゴゴリにおける文学による社会的モラルの樹立、社会教育、社会改良の志向の発生も、その地盤は実にここにあったのである。その点に関する限り「肯定の」叙事詩『タラス・ブーリバ』も「否定の」叙事詩『死せる魂』も共通の精神に貫かれていたとも云える。

この共通の精神をもっと広く捉えたエルミエロフの次の言葉は、ゴゴリの全作品の根本精神を表現したものであるとして注目に値する。『タラス・ブーリバ』の第

二版の仕事に作者が『死せる魂』の仕事と同時にかかっていたということは意味ぶかいことである。『死せる魂』の中で鳴りひびいている歌は…それはそのまゝ『タラス・ブーリバ』の中で聞かれる歌である——即ち人民の歌である。これら二つの天才的な叙事詩の間のコントラストはその顕著さにおいて驚くべきものがあり、異常なものがある。前者には肯定のペースがあり、後者には否定のペースがある。前者には諸性格の偉大さと完璧さがあり、後者には諸性格の下らなさがあり、支離滅裂がある。前者にはヒーローたちにたいする愛情があり、後者には登場人物にたいする侮蔑がある。それにしても、人民の力や美と、その被圧迫的迫害的状況との間のコントラスト、人民の偉大さ、崇高さ、詩的性格、生き生きとした創造的叡智と支配的上層部である「身分の高い下僕階級」の卑劣さ、残忍さ、愚鈍さ、貪慾さとの間のコントラストは、誠に驚くべきものである。が併し、このように全く相異なっているながら、これらの叙事詩は精神において共通であり、両者はともにふかいリアリズムの性格、人民性、霊感的な祖国愛、抒情性、叙事民謡的性格によって貫かれている。」

#### 4

エルミエロフの、ゴーゴリのスタイル乃至手法に関する研究は一種独得なものである。この評論家の才能の特異さ、独創性は、実に、作品の随所から行間にひそむ作者の考や意図を嗅ぎだしてくる鋭い感覚にあると云えよう。殊に、最も苛酷であった当時の検閲官の目をくらすために独特な手法を用いた作家ゴーゴリの作品の解明に当って、この著者特有の感覚は比類ない力を発揮している。ここに、その実例の幾つかを紹介しよう。

エルミエロフは、単語一つからでも重大な結論をひき出してくる。例えば、彼は、ゴーゴリが作品の諸所で独得な使い方をしている「…さえ」という助詞に着目している。そして、『降誕祭の前夜』の、エカテリーナを描写した「背のひくい、多少女丈夫にさえ見える云々」という句や、『死せる魂』の中の、「彼ら（県知事の下僕たち）の顔は肥って丸く、中には疣さえあるのもあった」という文章や、「他の者も多少教育のある連中で、カラムジンを讀んだことのある者や、モスクワ報知を讀んだことのある者や、ほとんど何一つ讀んだことさえない連中だった…」というような文章から、この助詞の使い方の謎を解きあかして見せるのである。即ち、彼は、第二の例では、一様で個性のない

官吏たちにあっては、「個性」を示す特徴と云えば疣くらいのものだという意味で、彼らの一様な精神的空虚さを暗示しているものと解き、第一、第三の例では、「…さえ」のあとに、より高い質を期待すべき所で質の急激な低下をあらわす言葉を用いることによって、作者が対象の価値を減殺させ、間接にくさしているものと判断する。

これによく似た例は『馬車』の初版に出てくる文章である。この小説の初めの方に、「騎兵連隊が郡役所の所在地に駐屯してからは、すべてが一変してしまった。通りはごった返し、活気を呈した、一口に云えば、すべてがすっかり見違えるようになってしまったのである。街路をぶらぶら横切っていくのはもはや雄鶏ではない。羽飾のついた三角帽をかぶった将校が昇級や素晴らしい煙草の話をしてしに将校の家へ歩いていくのであった」という文章があるが、著者はこの文章から、敏感にも、話題と云えば昇級とか煙草の話くらいしかない将校とぶらぶらしている雄鶏とを同列においた、心ある者にそれとなく感づかせようとするゴーゴリ特有の皮肉と嘲笑を読みとっているのである。これは決して著者のこじつけではない。こじつけでない証拠として、著者はそのあとにK・C・アクサーコフの回想録からの引用文をちゃんと用意している。即ち、それには、「彼（スタンケーヴィッチ）とわたしが大学を出て間もなくのことだが、スタンケーヴィッチがゴーゴリの草稿のままの『馬車』を、どう手をまわしたのか、手に入れてきた。これはその後間もなく『同時代人』に発表されたものである。スタンケーヴィッチの家にはわたしとベリンスキーが居あせた…スタンケーヴィッチが「騎兵連隊が郡役所の所在地に駐屯しはじめてからは、すべてが一変してしまった云々」という初めの数行を読みおえた途端に、突然われわれは笑いに取っつかれてしまった、何とも云いようのない笑いだ。三人とも一緒になって笑った、そして長いこと笑いは静まらなかった」とある。

こうした、文章の裏を読みとる著者特有の才能がもっとも遺憾なく発揮されているのはト書き以外に地の文の説明のつかない戯曲の『検察官』の解釈においてであろう。そこでは、市長が、老獪すぎ、抜目がなさすぎるために、却って、馬鹿で怪薄なフレスタコフを自分より上手な悪党と誤認して、自分がしかけた心理の罠に自分から引っかかって行く心理過程が事細かに解説され、両人の心理の葛藤が見事に解きほごされている。数ある研究書の『検察官』に関する解釈中正

に白眉とも云うべき出来栄えと云えよう。

更に、ゴゴリのスタイルに著者が新解釈を下しているものに、比喩の問題がある。わたくしの記憶に間違いがなければ、マンデリシタムあたりからだったと思うが、これまでゴゴリの比喩については、その比喩の展開の仕方が大規模にわたることが多く、往々にして附加的な対象が独立の形で成長するため、比喩が新たな形象の発展過程において比喩たることをやめ、変貌して主体となる、という見方が一般的であった。エルミローフはこの見方に反対して、『恐ろしき復讐』のドネープルの描写と『死せる魂』の第一章の舞踏会の描写に用いられている比喩を実例に取って、それらに新しい独創的な解釈を与えている。ここでは、そのうちの舞踏会の描写だけを取りあげてみることにする。

「黒い燕尾服がちらちら動き、あちらこちらにバラバラになったり群がったりして動きまわっていた。それはちょうど、夏の7月の頃に、明けはなした窓を前にして、年とった女中頭が白いキラキラしている砂糖の塊を砕いて細かいかけらに割っている時に、その氷砂糖の上を蠅が飛びまわっている様に似ている。その囲りには子供たちが全部集って、金槌を振りあげる彼女のザラザラした手の動きを興味ぶかそうに見まもっている。ところで、微風に舞いあがった蠅の空中中隊は、デブプリ肥えた旦那方のような恰好で我がもの顔に飛びこんで来て、老婆の視力が弱っているのとその目が太陽の光に邪魔されているのをよいことにして、あちらはバラバラ、こちらは密集してと云ったぐあいには、おいしそうにかけらに集る。彼らは食物の豊富な夏に満ち足りているところへ持<sup>たか</sup>って来て、それだけでなくとも一歩毎に並んでいるおいしい御馳走に満腹しているので、飛びこんでくるのは飛びこんで来て、それは物を食べようなどというのでは全くなくて、自分の存在を示す、つまり、砂糖の山の上を歩きつ戻りつしたり、後足や前足を擦りあわせたり、その足で羽の下を搔いてみたり、両方の前足を延して自分の顔を擦ったり、くると向きを変えて飛び去って、また新たな、うるさい中隊を引き連れて飛んで来たりするためだけなのである」

この一見冗長とも見える、広範に展開された比喩について、著者は次のように穿った見方をしている。「県知事の屋敷の寄木細工の床の上を黒い燕尾服の群がちらつく様を白い精製砂糖の上に蠅がちらついている様にたとえたこの比喩があまりにも広範にわたっているために、県知事庭の舞踏会という対象それ自体が

完全に取りちがえられてしまっているようにさえ見える！ このことが二、三の批評家に、ゴゴリは、まるで主目的に熱中するように、自分の広範な比喩に夢中になってしまっていると主張する根拠を与えたのである。併し、ここで最も重要なことは、蠅の仕草を見守りながら、われわれは瞬時たりとも想念の中で舞踏会を見うしなっていないということである——われわれは舞踏会から離れないばかりか、逆に、舞踏会それ自体が蠅の姿をとってパロディ的にわれわれの眼前に展開されてくるのである。」「蠅が飛ぶために羽をひろげたり、反対に、止りながら厳かに羽をたたむ」様子は正に、「カヴァレールがちょっと席については直ぐに立ちあがり、燕尾服の裾をひろげたりたたんだりして「類似の」動作をするのに似ている。」「彼らが飛び去ったり、また飛んで来たりするのは、「食べる」ためでもなければ、仕事をするためでもない」「単に自分の存在を示すためであり、厳かに行きつ戻りつしたり、両足を擦りあわせたり、「向きを変えて、また飛んで来」たりするためである。」つまり、「この比喩は、踊り手たちの仕草を意味する、飛び来たり飛び去ったりする動作が、この舞踏会全体が空騒ぎであることを、何にもならないことを、これら踊り手の中隊の退屈きわまることを暴いて見せている」のに他ならない。そして、これを、敵にはわからないように、敵を怒らせないように、取りようでどうにでも取れるような形で敵を嘲笑し、諷刺する、ゴゴリ特有の「巧妙な」手法であると著者は見ている。

\* \* \*

このような訳で、著者は、他の者ならば見逃してしまいそうな、どんな些細な微候からでも、作家の精神の本質を抽きだしてくる特異な才能を持ちあわせている。詰り、彼の著書では、それらの細かい微候が常に作家の精神的特質の太い線につながっており、それらの解明を助ける役を演じているのである。そこに、作家の本質を説明するためにあらゆる力を動員し集中する著者の構成力の非凡さが見られるわけである。が、醜<sup>みにく</sup>く考えれば、この整然たるゴゴリの像の捉え方が本書の大きな長所であると同時に、短所でもあるとも考えられないことはない。という訳は、ロシアの文豪の中でもゴゴリは最も複雑な矛盾した性格の持主であって、著者はその矛盾を矛盾のままに描きだすには余りにも鋭い頭脳と潔癖さを持ちあわせすぎるからである。とは云え、その欠点も本書の他の優れた価値を損ねるほどのものではないことは勿論である。